

「企業の農業・農村参入」の 迎え方



セブンファーム富里は いまどうなっているか

千葉県富里市・(株)セブンファーム富里

文=編集部
写真=高木あつ子



左から津田博明さん、
イトーヨーカ堂の久留
原昌彦さん。パートの
3人は地元の非農家

セブンファーム富里は、5年前につくられたイトーヨーカ堂（セブン&アイホールディングス）の「直営農場」。いまや全国9カ所にある農場の第1号だ。県内店舗の食品残渣からつくられた堆肥を使って野菜を育て、「セブンファーム」ブランドとして店舗に並べる。栽培するのは、代々富里で農業を営む津田博明さん。イトーヨーカ堂と手を結ぶにあたって、津田さんに見えていたものとは？

「ニンジン播く前に堆肥ふりするから、その日においでよ」と、津田博明さん（62歳）。
「イトーヨーカ堂の担当の人も来るしさ」

じゃあぜひその日に伺います、と言ってからふと考えた。「でもあのー、津田さん。担当者がいたら、なんかほら、言にくいこととかありませんか？（私も聞きにくいかもしれないし?）」

すると、「あー、いいのいいの。むしろ目の前にいたほうが、いろいろ話しやすいわー。俺、いつも何でも言ってるから!」。

ということ、エンリョなく農場に向かうことにした。

最初は「管理人」の予定だった

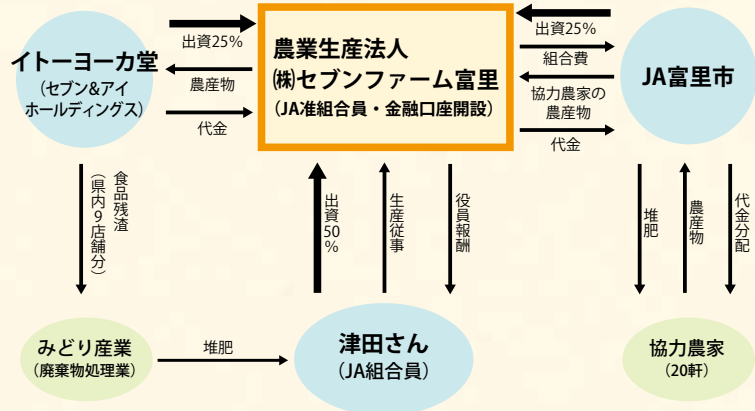
(株)セブンファーム富里は、2008年8月に津田さん、イトーヨーカ堂、JA富里市が出資してつくった農業生産法人だ。

イトーヨーカ堂が農業参入を計画したのは、07年の改正食品リサイクル法による。5年後までに、食品廃棄物のリサイクル率45%を達成しなければならなかったのだ。それまでも残渣の堆肥化はしていたが、もっと計画的に使う農場が必要だった。

セブンファーム富里の仕組み



イトーヨーカ堂の残渣の8割は野菜や果物。各地域の廃棄物処理業者に委託し堆肥化している。業者によって工程が違うので、各セブンファームではそれぞれ異なる性質の堆肥を使っている



そこで、業務用野菜の契約栽培など、企業との提携で知られるJA富里市に相談。JAが声をかけたのが、専業でスイカやニンジンをつくる、地区のリーダー的存在の津田さんだった。

「初めは、ウチの畑をイトーヨーカ堂が借りてタネ播きをするので、管理料を払うから草取りや水やりをお願いしますって話だった。まあ、土地を貸すのはいいさ。でもそのとき言ったんだ。すぐに黒字にはならないよって。農業は最初の3年くらいは赤字だよ。あんたがた、すぐに泣いて帰るよって」

その後、イトーヨーカ堂は経営方針を転換。「直営農場」といっても、経営は農家である津田さんが行ない、イトーヨーカ堂がほぼすべての農産物を買収したかたちになった。09年に農業参入し、農地を借りて社員に仕事させている大手スーパー・イオンとは違うパターンだ。

「餅は餅屋。農業は農家に任せたほうがうまくいくって判断したんだ。俺だって船乗って魚捕ってきなと言われても、すぐにはできない」

とはいえ、大企業と契約して、うまくいかに自分だけ痛い目を見るのは嫌だ。そう思っていたところ、JA富里市も共同出資することになり、間に農協が入るならと、津田さんが80%、JAとイトーヨーカ堂が10%ずつ出資し、農場がスタート。2年目には黒字経営となった。

だが、こういう方式は今のところ、富里農

場ともう1カ所、埼玉県深谷市のセブンファームだけだ。イトーヨーカ堂は現在各地に次々と「直営農場」を広げているが、地元の出資を得て農業生産法人を設立するのは結構大変なことで、子会社の(株)セブンファームが最大95%出資する新会社を立ち上げての参入が多い(リース方式)。目指すリサイクル率は昨年達成。13年度中には合計10カ所、60haまで拡大する予定だ。

作付計画は農家が決める

セブンファームの大原則は、とにかく専用の堆肥を使うこと。富里農場の場合は県内の廃棄物処理業者・みどり産業が、県内の9店舗から収集した残渣を堆肥化。津田さんはそれを年間、反当たり500kg〜1t入れる。品目や防除回数などは農家や農協に任されている。

畑は、津田さんの農地のうち2haと、近隣の農家の農地(今年は1.5ha)。いずれも耕作放棄地だった場所だが、これをセブンファーム富里が借り、ナス、ダイコン、ニンジン、ブロッコリーなど数種類をローテーションさせる。

「それぞれの畑に向いていて、回転のいい作物を入れる。スイカなんかは無理。あんなに手間がかかるものは家族労働じゃないと。人件費で会社がふっとんじゃう」と津田さん。「いかに連作障害を出さずに畑を回すかは、僕たちでは考えつかない」というのはイトーヨーカ堂の久留原昌彦さん。青果部セブン